

～医療を巡る人権～

～依存症経験者～

## 「依存症は病気。継続した治療が必要。」

友人に誘われて覚醒剤を使用してしまったという S さん。そのうちに依存症になってしまい、覚せい剤取締法違反による逮捕から釈放された2週間後にまた同じ罪で逮捕され、実刑判決を受けました。

今は、大分DARC(ダルク)で依存症の人やそのご家族をサポートしています。

### ○覚醒剤使用の最初のきっかけは何でしたか。

17歳の時です。一緒にいた友だちから誘われて使用したのですが、好奇心もあり、またその友だちに嫌われたり馬鹿にされたりするのが嫌で手を出してしまいました。怖かったですが、初めて使用した時に、イメージしていた廃人になるというような変化は感じませんでした。そのため使用するハードルが下がり、高揚感や万能感を求めて、週に1回くらい使用するようになったら、いつの間にか薬物依存症になっていました。

### ○逮捕されるまでの経緯は。

このままではだめだと思い、希望して海外勤務をしましたが、依存症があるため結局6ヶ月くらいでまた使用するようになりまし。覚醒剤はお金がかかります。使用し続けていると量が増え、ますますお金がかかるようになります。最初は家財道具を売ったりしましたが、そのうち複数の消費者金融からお金を借りたりして、いつも覚醒剤を買うためのお金のことを考えていたような時期でした。27歳の時、覚醒剤を売っていることで有名な界隈で購入しようとして現行犯逮捕されました。しかし初犯は実刑を受けることはあまりなく、私も執行猶予がつきましたが、釈放から2週間後にほぼ同じ場所でまた逮捕され、約2年間刑務所に入所しました。

### ○DARCに関わったのは。

大阪出身なのですが、自分が服役中に母が大阪DARCに相談をしたのがきっかけで、29歳の時刑務所を出所して北九州のDARCに入所しました。

### DARC(ダルク)とは

Drug(薬物)Addiction(嗜癖・病的依存)Rehabilitation(回復)Center(施設)の頭文字を取った造語で、1985年に日本で初めて創られた民間の依存症のリハビリ施設です。DARCでは、これまでの良くない人間関係や環境を絶つため、それまでの生活地域とは離れた場所に入所させ、友人等との連絡も一切取れないようにします。

### ○DARCに入所してうまくいきましたか。

母に言われて渋々入ったので、薬物と決別できる自信はなかったですね。北九州DARCは1年3ヶ月で退所し、アパートを借り再就職しました。しかし、大量に摂取すると覚醒剤と似たような感覚が得られるような合法的な薬物を、生活費を節約して購入し服用していました。それでも夜だけDARCに通い他の入所者には、いいところだけを見せて薬物から足を洗ったようにごまかしていました。みんなが、クリーン（薬物を使っていないこと）の状態をお祝いしてくれるのに罪悪感を感じていました。

### ○その状態から今クリーンを保っていられることになったきっかけは何ですか。

DARCを出ても薬物を摂取していることの罪悪感に耐えきれず、思い切って当時の施設長に告白しました。当然激怒されると思ったのに、「苦しかったよな。」と共感してくれ、そしてハグしてくれた時号泣し、そこで絶対にやめようと決心がつかしました。その施設長も薬物依存経験者であったため、共感されることがとても心に響いたのです。それから12年間、全く薬物を使用していません。

### ○今取り組んでいる活動で目指していることは。

その恩人である施設長が大分に行くと言うことで、自分も指導員として大分に来ました。その後施設長が事故で亡くなり、自分が施設長となりました。現在、入所者のほとんどは薬物やアルコールの依存者で、寮で共同生活をして、昼は運動したり、自助グループとして話し合いをするなど社会復帰を目指しています。活動としては、依存症本人へのサポートもさることながら、依存症患者の家族の助けになればと思います。親は「育て方が悪かった。」と自分を責め、隣近所には隠し、親戚にも相談できず孤立しがちです。今まで大分DARCに入所した人は平成9年の設立から1000人程度で、その後順調に薬物から離脱できるのは2割程度かなと思います。ほかの方は自分のように回復まで時間がかかったり、他のDARCに移ってまたやり直したりしています。それほど依存症からの回復は簡単ではありません。

### ○社会に伝えたいこと、してほしいことはありますか。

薬物依存症の人は病気の患者としてではなく、犯罪者として見られがちです。依存症は病気だから、風邪をひいたら病院に行くように治療が必要です。保護司や協力雇用主の方々は、排除されがちな依存症の人を受け止めてくださるありがたい存在ですが、病気として適切な治療を継続することが必要だと理解してくれる人は少ないように感じます。見た目には良くなっているように見えても繰り返す人が多いので、医療機関への通院や自助グループへの参加を継続的に指導し、勧めてほしいと思います。